3-1
西谷の
民俗

西谷の食文化

はじめに

この第３章「西谷の民俗」では、地域の方が編集された郷土史や聞き取り調査資料を基に、西谷の伝統や暮らしについて書いています。西谷には、これまで地域の方が大切に守り受け継いできた伝統、時代の変化に伴い形を変えた行事や暮らしがあります。昔の暮らしと今日の西谷の暮らしから、里山西谷の魅力をお伝えし、未来への継承へと繋げていきたいと思います。

昔の食事事情

昔の人々の普段のご飯は朝晩ともにご飯、味噌汁、漬物などでした。昼はお弁当で、ご飯に梅干しや鰹節がのったものだったそうです。肉はあまり食べられず、ときおり行商が売りにきた魚や育てた野菜を炊いたものなどがでていたそうです。

こびるという昼食と晩ごはんの間の農作業の休憩時には、高菜の葉で包んだおにぎりなどを食べていました。主食のお米は量を増やすため、麦や芋などを混ぜて食べていました。また、味噌や醤油は、育てた大豆を使って各家で作っていました。

年中行事の食事

正月

大晦日には年越しイワシといって、イワシが食べられたそうです。お餅は 29 日を避けてつき、お雑煮は味噌で大根や人参と丸餅がはいっています。

１月７日には七草粥（ただしナズナだけしか入っていない）、そして正月の終わりの 15 日のとんどの日に、鏡餅を食べます。とんど粥と呼ばれる小豆、お持ち、お米を塩で味付けしたお粥を食べていた地区もあったようです。

カミサン正月　立春（２月４日）

正月と同じことをしていました。モチをつき、前日の節分には大晦日と同じことをしたそうです。また、この時期は寒餅をする時期で豆・のりなどをいれたお餅をつきました。

ひな節句

旧暦で祝うため、４月３日に行います。ヒシモチをついたり、山遊びといって巻きずしなどのお弁当を持って高い山にいったそうです。

お盆

地区によって違いがありますが、お盆にはきゅうりやなすを供えたり、肉を控えていたようです。

西谷のちまき

旧の端午の節句に合わせて作るちまき。昔は西谷の多くの家で作られていたそうですが、いまではちまきを作る家は数少なくなりました。一般的なちまきはササで包みますが、西谷のちまきの特徴は、いまでは大変珍しいナラガシワとヨシの葉を使って作るところにあります。いまでもこのナラガシワとヨシの葉を使ったちまきを作っているのは、武庫川中流域と猪名川上流域の北摂里山地域のみです。

作り方

①米粉（うるち粉）ともち米粉、食塩を混ぜて、湯を入れながら練ります。
米粉ともち米粉の割合はおおよそ７：3。割合は各家により異なります。

②練りあがったら形を整形し、ナラガシワの葉で包みます。
形は俵型や円錐形など各家によって異なります。

③ヨシの葉でナラガシワで包んだ餅の周りを巻いていきます。

④ワラで縛ります。
ワラの代わりにガマの葉やイグサ、シュロの葉で縛る場合もあります。

⑤巻き上がったちまきを 10 本ずつ束ねます。

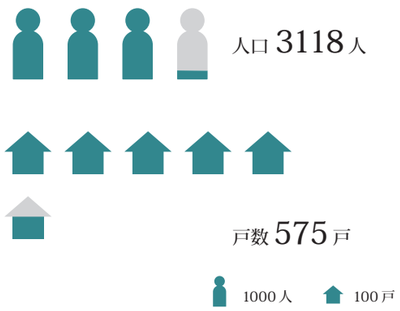
⑥でき上がったちまきを湯がきます。

ちまきは保存食としても使われていたようです。農業の際のおやつとして、また進物として持っていったそうです。各家において、自分たち独自に、作り方を工夫し、今に伝承されています。各家によってちまきの味が違ったそうですが、特に原料に使ったうるち粉ともち米粉の割合によって違いが出ていたというエピソードもあります。

西谷の今昔

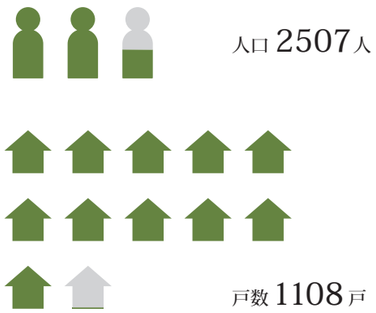
人口

昔 明治41年



一戸あたりの人数も多く、人口も増加していました

今 平成30年



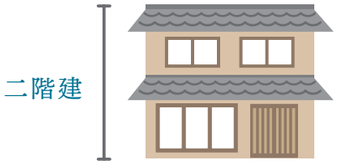
進学や就職などで他地域に居住する人が
増えました

家屋

昔 明治41年

茅葺１階建き民家
日本の田舎特有の建築様式

今 平成30年



瓦葺き
建築様式の近代化（瓦、建材、工法）
個室が必要になりました（プライバシー）

家族と生活

昔 明治41年

祖父母、父母、子、孫が一緒に住んでいました

今 平成30年

同居する家族が少なくなりました

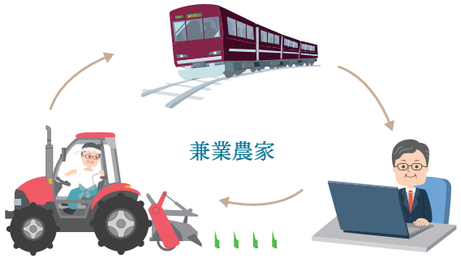
なりわい

昔 明治41年

農業中心

農業を中心に生計を立てていました

今 平成30年



兼業農家

地域外で働く場所が増え、
会社勤めをしながら農業をしています

食事

昔 明治41年

地元の食材を中心とした和食

自給自足で、米、野菜、魚の干物、
鶏肉（かしわ）などを食べていました

今 平成30年

和・洋・中・他なんでも

外食するところが増え、スーパーで買えば
何でも食べられるようになりました

水と燃料

昔 明治41年

井戸と薪炭

井戸水、きれいな川の水、薪、柴、炭、練炭
（里山資源の活用）

今 平成30年

水道とガスと電気

インフラの整備（電気、ガス、灯油）

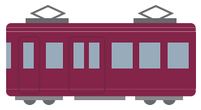
交通

昔 明治41年

徒歩、汽車、荷車

基本的には徒歩での移動、
武田尾駅にも徒歩で行っていました

今 平成30年



車、電車、バス

車移動が生活の中心に
なりました

周辺地域との交流

昔 明治41年

東西の交流が中心

東谷・中谷・高平との交流が盛んで、
通婚圏でもありました

今 平成30年

南北の交流が増加

宝塚市に合併したことで、
道路が良くなり南北の交流が増えました

3-3
西谷の民俗

里山を守りつづけた人々の暮らし

江戸時代の茅葺き民家 旧東家住宅（宝塚市立歴史民俗資料館）

里山学習の教材としての茅葺き民家

里山をつくった人びとの暮らし

昭和 30（1955）年代の燃料革命によって里山は荒廃していきました。それ以前の人々の暮らし方を学ぶことで、里山がどのように活かされ維持されてきたかがわかります。そのための体験的な学習教材として「江戸時代の茅葺き民家」があります。

江戸中期の茅葺き民家

宝塚市立歴史民俗資料館（map.B2）の１つである「旧東家住宅」は、昭和 49 年２月、宝塚市大原野字小林８番地にあった東正雄氏邸が宝塚市に寄贈され、昭和 51 年に現在の宝塚市立宝塚自然の家敷地内に移築し、復元したものです。

建築年代は、棟札など確定する資料がなく、明らかではありませんが、江戸時代中期ごろのものと考えられます。北摂地区の入母屋造の三間取り妻入茅葺という造りです。中流階級の農家の代表的な建物として、昭和 53 年３月 17 日には兵庫県指定重要有形民俗文化財に指定され、多くの人が見学に来ています。

里山と茅葺き民家

この住宅は構造物のすべてが里山に依存していました。屋根はススキやヨシなどカヤ（茅）といわれる植物で葺（ふ）かれたいわゆる茅葺きです。建物の基本構造物である柱や建具は全て山から切り出した木材や竹と土などを材料にしてつくられています。炊事場は土づくりのかまど、燃料は薪や柴、食料などの保存容器も土器、陶器などでした。炊事、洗濯には山水や川水が使われていました。

軒下に各種の農具が置かれている

かまど
里山から採ってきた柴や薪を使って煮炊きをした。

薪（左）と柴（右）

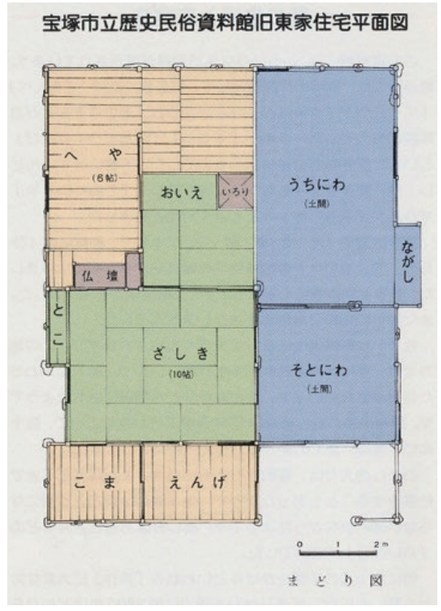
間取りと機能

この資料館の間取りは「ざしき」、「おいえ」、「へや」とよばれる三室からなっています。

出入口の土間の左側に「ざしき」と呼ばれる床つきのへやがあり、ざしきは 10 畳で、床の間があり、仏壇が置かれています。その奥に、「おいえ」と呼ばれるところがあります。ここは板の間でしきられて、囲炉裏があり、居間として使われていました。囲炉裏を中心にして、家族が食事をしたり、世間話に花を咲かせたりして、家族の団らんのための大事な場所です。その横に、「へや」がつくられていますが、ここは、寝室であり、また、物置として使われていました。

ざしきの手前には、巾１間（約２メートル）のひろい「えんげ」があり､その上に物置棚があります。これは珍しい作り方で、よこの「こま」とともに、雨戸を縁の外側に作ったときにできたと言われています。こうした広い縁がある家は、西谷の妻入農家にみられます。

土間は「そとにわ」と「うちにわ」に分かれており、うちにわは、炊事場になっています。



昔の生活と衣食住

この資料館には、いろいろな生活用具が展示されています。着るものは、普段の作業着として野良着があり、「もんぺ」「てっこう」「きゃはん」などが使われ、そのほとんどが自家製のものでした。また､「ぞうり」「わらぐつ」「たび」といった履き物も自給自足のものでした。下着には「ふんどし」や「腰まき」「ももひき」等があり、「てぬぐい」や「ずきん」「ふろしき」などもよく利用されました。

囲炉裏のあるおいえ（居間）

食事は五穀（米･麦･粟･稗（ひえ）･豆）が中心で、副食には「ひもの」や「塩づけ」等の漬物や乾燥食品が保存食になりました。食事をする場所も決まっており、箱膳などを用いました。また神仏にも毎日お供えを欠かしませんでした。

住まいは気候風土によって大きく左右されますが、この地方では、冬になると比較的寒さが厳しいので、それにあわせた作りがされています。また家相なども問題にされたようです。

むかしの人々は、夜明けとともに起き、また夜おそくまで仕事をすることもあったようで、遊ぶ時間は現在と比較にならないほど少なかったようです。楽しみはお盆と正月などの「ハレの日」ぐらいでした。

特に八十八の手間をかけるといわれる「米作り」に大変な労力を要しました。

3-4
西谷の民俗

西谷の農業

農業の移り変わり

昭和 30 年以降、プロパンガス、炊飯器、洗濯機、テレビなどが出現し、生活が大きく変わりました。農業も時代と共に変化していきます。昭和 40 年代に入ると、田植機やトラクターやコンバインなどの機械が広がりはじめます。これにより、稲作の農業の機械化・省力化が急速に進みました。そして、それまで使われていた数多くの農具が農家から無くなっていきました。

昔の農具たち

機械化する前に使われていた昔の農具を紹介します。

犂（すき）

犂は主に牛や馬に引かせて田畑を耕すのに用いる農具です。昭和 30 年代に動力式耕うん機が普及するまで活躍しました。

馬鍬（まぐわ）

田植え前、田に水を張り、土を細かくくだいてどろどろにし、平らにならす「しろかき」の作業のとき、牛や馬に引かせた農具です。

足踏み回転脱穀機

ペダルを足で踏んでドラムを回転させ、稲穂をあててもみを扱（こ）くタイプの脱穀機です。作業能率がよく、千歯扱きに代わって広まりました。

唐箕（とうみ）

唐箕は風の力を利用し米を選別する農具です。ハンドルを回して羽根板を回転させると、重い米粒は注ぎ口に近い右側の口に落ち、軽い米粒は遠い左側の口に落ち、「もみがら」は左端から外へふき飛ばされます。

万石通し（まんこくとお）

もみすりした玄米のなかにまじっているもみやくず米をより分ける農具です。上の注ぎ口に米を入れると、ななめの金網をすべり落ちる間に、小さなくず米は編み目をぬけ落ち除かれます。

一斗枡（いっとます）

米 1 斗を量るための枡です。1 斗は 1 升枡 10 個分で約 18 リットルにあたります。米を入れ、上端を水平に均（なら）すことにより計量します。

3-5
西谷の民俗

西谷の産業

上佐曽利地区のダリア

西谷の最北端に位置する上佐曽利地区（map.B2）は、全国に誇るダリアの生産地です。南部の市街地に比べ 2 ～ 4 ℃気温が低く、ダリアの栽培に適した冷涼な気候です。昭和 5 年（1930）、有馬郡有野村（神戸市）からダリアの球根を購入し、上佐曽利地区で初めて切り花の栽培が開始されました。

昭和 10 年（1935）には「佐曽利園芸組合」が設立され、地区全体でダリアの栽培に取り組むようになりました。昭和 25 年（1950）には切り花から球根生産へと移行し、最盛期の昭和 45 年（1970）頃には年間 300 万球を生産していました。

その後、球根の生産数は減少していきますが、現在でも全国生産の約 4 分の 1 を占める年間 80 万球を生産しており、切り花の出荷も行っています。

「宝塚ダリア園（map.B2）」では、初夏と秋の開花時期に合わせて観光花園を開園、秋には花つみが楽しめます。数百種類のダリアが一面に咲き誇ります。

大原野の箕（福箕）

西谷の大原野地区（map.B2.3）の箕の生産は近在に有名でした。西谷の大原野地区では農業収入だけでは生活が苦しく、余業として箕を作っていました。元禄 14 年（1702）の『摂陽群談（江戸時代に編纂された摂津国の地誌）』の中にも名物として「大原野箕」が出てきます。

明治になっても生産は増加し、年生産高も明治 9 年の約 1 ～ 2 万枚から 38 年には約 7 万枚まで増えました。その間、明治 20 年に箕営業組合を結成、生産者の保護や流通の強化などを図りました。しかし、現在では箕そのものの生産は殆ど行われていません。

明治の初期に西宮神社の初祭十日戎の時に売られる福箕の生産が始まりました。実用品の箕だけでは販売量も限られるので、お多福の面をつけた福箕を作り売ったところ、大いに売れ、現在でも大原野でこの福箕作りは続いています。

3-6
西谷の民俗

西谷の行事

西谷の行事

西谷には四季それぞれに行事があります。昔から続く伝統的なものや新たにできたもの、生活の変化に伴い消えてしまったものもありますが、西谷の一年の行事を紹介します。

とんど　1月

長い竹などでやぐらを組み、正月の松飾りや注連縄（しめなわ）などを燃やし、1年の無病息災を祈る伝統行事です。現在でも各地区や集落で行われています。

厄神さん　1月

1月19日に波豆八幡神社にお参りします。厄は、男性は25・42・61歳、女性は19・33・37歳ですが、そのうち男性42歳、女性33歳を重んじて厄参りをします。

端午の節句　6月

端午の節句には「ちまき」を作って食べます。子どもの頭にショウブを巻いたり、ショウブを風呂に入れる風習が昔はあったそうです。

西谷ふるさと祭り　7月

西谷ふるさと祭りは昭和58年から始まりました。現在は西谷小学校（map.B3）を会場に、たくさんの人が訪れるお祭りです。

ケトロンまつり　8月

宝山寺（map.B3）で行われる300年の歴史を誇る念仏行事です。宝塚市の無形民俗文化財に指定されています。

秋祭り　10月

各神社で行われる秋祭りでは、神輿（みこし）やだんじり、獅子舞など、各地区によって特色があります。

収穫祭　11月

西谷の新鮮野菜市や地域食材を堪能できる商品などがあり、地域内外から多くの人が訪れます。現在は夢プラザ（map.B3）で開催されています。

いのこ　11月

藁で縄を巻き、先を手で持てるようにして、子どもたちが家々をまわり、お菓子などをもらったりします。いのこは百姓の神であるといわれています。現在でも一部の地区で行われています。

正月準備　12月

注連縄（しめなわ）飾りは20日ごろから作り出していました。餅つきは、29日につくのはクモチといって縁起が悪いとされ、28日や30日に行われていました。

1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

3-7
西谷の
民俗

西谷の信仰

祖先崇拝

波豆を中心とした中世の石造美術の板碑や宝篋印塔は子孫が祖先のために建てた供養塔です。特に、波豆八幡神社にある板碑は、全国で２番目の大きさで、当時の人々の厚い信仰心の現れといえます。そうした信仰心により、西谷の中世美術が発展したといえます。

普明寺の宝篋印塔

波豆八幡神社の波豆石造美術群

講とは

西谷には、地域の人々が日にちを決めて集まり、特色のある神仏に祈るとともに、宴をしたり食事をしたり、ときには本山や本社へお参りに出かける「講」がたくさんみられます。信仰と娯楽を兼ねた庶民の集まりを「講」と呼び、時代の流れや生活の変化により、簡素化されながらも、地域住民の親睦を深める機会として 100 年以上も続いています。伊勢神宮を崇拝する伊勢講、火の神を祀る愛宕講（「あたん講」と呼ばれています）などがあります。中には宝山寺のケトロン（念仏講）、波豆八幡神社の厄除祭り（八幡講）のように祭りとして知られている講もあります。

普門寺と境野天満神社（map.B3）

普光寺と長谷素戔嗚神社（map.B2）

西谷の寺院・神社

神と仏とを調和させ、同一視する思想、また神道と仏教の同化を示すものを神仏習合といいます。西谷のいくつかの地区では、神社と寺院が近接し、神仏習合の歴史をみることできます。また、西谷の寺院・神社には、鎌倉時代以降の文化財が数多く残されています。

佐曽利（上佐曽利・下佐曽利地区）

上佐曽利素盞嗚神社（map.B2）

上佐曽利素盞嗚神社の秋祭り　大太鼓

万正寺（map.B2）

長谷地区

長谷素戔嗚神社への参道

長谷素戔嗚神社の秋祭り　やぐら太鼓

普光寺

波豆地区

波豆八幡神社

波豆八幡神社の秋祭り　宵宮の御神輿

普明寺

大原野（東部・西部・中部地区）

大原野素盞嗚命神社の秋祭り
西部ふとん太鼓

大原野素盞嗚命神社の秋祭り
東部やぐら太鼓

大原野素盞嗚命神社の秋祭り
中部だんじり

境野地区

境野天満神社

秋祭り

普門寺

玉瀬地区

玉瀬素盞嗚命神社（map.B3）

秋祭り

満福寺（map.B3）

切畑地区

切畑素盞嗚神社の鳥居（map.C4）

切畑の各戸を回る獅子舞

願宗寺（map.C4）

ケトロンまつり

300年の歴史を誇る念仏行事

参道を登る行人

ケトロンまつりは、毎年8月14日の夜（お盆の前夜）に、宝山寺の境内で行われる燈籠会（とうろうえ）の一種で、疫病除けとして江戸時代から300年以上続いている健康祈祷の念仏行事です。昭和51年、宝塚市無形民俗文化財に指定されました。

ケトロンの由来については、行人が突き鳴らす鉦（かね）や太鼓の音が「ケトロン」と聞こえるという説や、お盆にお供えする「献燈籠」がなまってケトロンと呼ばれたという説など諸説あります。

大原野地区の子どもたちが西部組、中東部組に分かれ、それぞれが鉦、太鼓、音頭の9人体制で念仏行人を構成します。行人は黒菅笠（くろすげがさ）、浴衣、白襷（しろだすき）、三尺帯、袴、裸足の姿になり、竹につけた六角燈籠を持った役員が四隅を固めます。行人たちは約1時間かけて宝山寺の山門から本堂まで続く階段を少し上っては立ち止まりを繰り返しながら、地域の人々の健康を祈る念仏を唱えます。

本堂前で念仏を唱える行人

未来につなげるための改革

300年という伝統の中で、改革が行われた部分もあります。その昔、行人は地域の長男のみで構成されていた時期もありましたが、今では女の子の行人も珍しくありません。また、行人を務める子どもたちや家族の負担も軽くしました。

さらに、祭りの中でも行人の名前を一人ずつ紹介・掲示して、子どもたちにも自尊心を持ってもらえるようにしたり、お客さんにも興味を持ってもらえるよう抽選会を行いました。

次世代へと繋いでいくために必要なもの

宝山寺本堂

行人を勤める期間は9年間、その後は指導者として後進の育成にさらに9年間携わります。練習期間は当日までの1週間とはいえ、ライフスタイルが多様化している中で、長きにわたり行人を務めることは容易なことではありません。ただ、幼児から中学生までいる子どもたちがお互いに教えあうという経験の中で一体感が生まれるため、ほとんどの子どもたちが最後まで務め上げます。そういった経験がケトロンの一番の魅力かもしれません。

宝塚市大原野ケトロン保存会では、守り続けてきたものを形に残して後世に伝えていくために、講演会の開催や広報誌の作成などを行いました。

西谷の概略年表

和暦	西暦	西谷の出来事	西谷周辺の社会状況	出典・確認元
古代〜中世				
	1 万年前以降	後氷期の終末期、 香合新田に有茎尖頭器を使う人びとがいた		宝塚市史（以降 市史）第 1 巻 P.121
	紀元前 5500〜4500 年頃	縄文時代に香合新田で石鏃を使い狩をする人びとがいた		市史第 1 巻 P.125
天禄元年	968 年		源満仲が家臣を率いて多田に入る。970 年には多田院を建立	市史第 1 巻 P.472
嘉暦 3 年	1328 年	波豆八幡神社の大板碑が造立される		市史第 2 巻 P.125
応安元年	1368 年	「多田荘等棟別銭村別注文」には佐曽利・玉瀬・西長谷・波豆・大原野・切畑が所領としてつながる。 玉瀬・大原野は百姓逃散中であった		市史第 2 巻 P.84 〜 89
応永 32 年	1425 年	波豆八幡神社の石造鳥居が造立される		市史第 2 巻 P.121
織豊政権時代				
元亀年間	1570 〜 1573 年		千本間歩（多田銀銅山）繁栄	市史第 2 巻 P.212
天正 14 年	1586 年	豊臣秀吉、紺青石を産する切畑の間歩を絵所狩野山楽に与える		市史第 2 巻 P.213
慶長年間	1596 〜 1615 年	片桐且元、西谷の大部分を所領する		市史第 2 巻 P.229、239、266
江戸時代				
慶長 10 年	1605 年	摂津国絵図が作られる		慶長 10 年（1605）『摂津国絵図』（市史第 2 巻 P.226、250）
明暦〜寛文	1655 〜 1672 年		多田銀銅山最盛期を迎える	市史第 2 巻 P.378
延宝 5 年	1677 年	延宝検地が行われる		市史第 2 巻 P.343、348
延宝 7 年	1679 年	長谷村初芝新田が開発される		市史第 2 巻 P.422
寛政 11 年	1799 年	下佐曽利村明細帳がつくられる		寛政 11 年（1799）『村明細帳』
慶応元年	1865 年	大原野の寺子屋が開業される		

和暦	西暦	西谷の出来事	西谷周辺の社会状況	出典・確認元
近代				
明治 6 年	1873 年	大原野・境野村が連合して 帰来小学校を開く		市史第 3 巻 P.74
22 年	1889 年	西谷村が成立		市史第 3 巻 P.130、283
32 年	1899 年	阪鶴鉄道生瀬ー三田間開通		市史第 3 巻 P.189
大正 8 年	1919 年	千刈貯水池堰堤構築工事竣工		市史第 3 巻 P.312
13 年	1924 年	西谷自動車株式会社設立		市史第 3 巻 P.340
昭和 30 年	1955 年	川辺郡西谷村が宝塚市に編入合併		
46 年	1971 年	西谷地区一帯を「宝塚自然休養村」に 指定・村開き		
48 年	1973 年	宝塚市立青少年野外活動センターに 宝塚市立少年自然の家が完成		
51 年	1976 年	宝塚市立歴史民俗資料館がオープン		
56 年	1981 年	国鉄福知山線塚口〜宝塚間の 複線電化工事完成・営業を開始		
平成 5 年	1993 年	兵庫県が宝塚新都市開発基本計画を策定		
7 年	1995 年		阪神淡路大震災の発生	
13 年	2001 年	宝塚長谷牡丹園が開園 長尾山トンネル道路が開通		
16 年	2004 年	宝塚市立少年自然の家が日帰りの自然体験型施設としてリニューアルオープン		
17 年	2005 年	地域利用施設・児童館・サービスセンターと農業振興施設との複合施設である「西谷ふれあい夢プラザ」がオープン		
20 年	2008 年	兵庫県立宝塚西谷の森公園がオープン		
21 年	2009 年	西谷認定こども園がオープン		
27 年	2015 年	丸山湿原群が兵庫県の天然記念物の指定を受ける		
30 年	2018 年	新名神高速道路（川西 IC 〜神戸 JCT 間）が開通、宝塚北サービスエリアがオープン		